



## 次世代に 原子力情報を継承

おんなの視点

国際原子力機関 (IAEA) 職員

花光 圭子



国際原子力機関 (IAEA) は、原子力の平和利用と核兵器の削減に貢献したとして、2005年12月にノーベル平和賞を与えられた。わたしはその翌年1月から、原子力エネルギー局に勤務することになった。年始めに受賞を祝うパーティーが館内で催され、集まったスタッフや退職者とともに歓喜の余韻に浸ることができたのは幸運だった。折しも、原油価格の高騰や地球温暖化防止を受け、安定かつクリーンな電源である原子力に、世界的な期待が高まっている。原子力事故が相次ぎ、開発が停滞したひと頃と比べ、先進諸国では「原子力カルネッサンス」が現実味を帯び、国際マーケットに日本企業が名を連ねる。躍動する原子力界の動きを、国際機関の中で感じられるのも貴重な経験だ。

わたしの所属する「Nuclear Knowledge Management (NKM、原子力知識管理)」は貴重な原子力情報や知識を体系的に保存し、次世代に継承するための施策や手段を開発し、実践を促すことを目的に2002年に新設された。NKMは、将来に引き継ぐべき情報や技術を分類・処理・保存する情報管理、その受け手となる人材を確保・教育する人材養成、そのためには各政府や組織がとるべき政策や経営方針の立案や実施など、さまざまな活動を通じ加盟国を支援している。

その中でわたしが担当するANENT（アジア原子力技術教育ネットワーク）は、アジア地域における原子力知識の伝承をインターネットによる教育や情報交換で補い、強化することをめざすプロジェクトだ。IAEA加盟国12か国がメンバーとなり、2005年にウェブサイト（[www.anent-iaea.org](http://www.anent-iaea.org)）、翌06年にサイバー教室用のスペースを立ち上げ、07年には8か国35名が参加する初のEラーニングコースを実施した。

インターネットによる通信教育は、原子力分

野に限らず、時間や費用を理由に従来の移動式トレーニングコースに参加できない人たちに貴重な学習チャンスを与えることができる。その効果を上げるには、ニーズに合った教材選びや使いやすいプログラム開発が不可欠だ。さらに、Eラーニング課程に試験や実務を組み合わせて、学位や資格が取得できれば、より充実したプログラムになる。アジア地域の次は南米やアフリカなどに活動を拡大することを夢見て、仕事に励んでいる。

ところで、IAEAのあるオーストリアは、過去に建設中の原子力発電所を国民投票の末、断念した経緯をもつ。それ以来、原子力発電計画はなく、チェコやハンガリーなど近隣諸国に対しても原子力の安全性に厳しい目を光らせている。再生可能エネルギーの開発に力を入れており、アルプス山脈の恩恵をうけて水力が総発電電力量の約3分の2（60%）、バイオマスが3%、風力が2%を供給している（2005年統計）。

現にウィーン市内にはゴミ焼却場の熱を利用した温水供給システムがあり、大きな公団住宅に温熱水を送っているし、東部のハンガリーにむかう車窓からは、ブルゲンラント州営電力が運転する壮大な風力施設が見える。とはいえ、自然条件に左右されること、電力需要が伸びていることから2003年ごろから電力輸入国に転じているという。

わたしが最初に住んだアパートの大家は、物理を学んだオーストリア人で元IAEA査察官だった。もし原子力発電所が計画通り稼働していれば、別の生き方もあっただろうと言っていた。完成前に建設ストップとなった発電所は、今もウィーン郊外にたっており、博物館のような役割を果たしている。

ウィーンにいる間にぜひ訪問してみたいと思っている。